



Tokyo Gakugei University Repository

東京学芸大学リポジトリ

<http://ir.u-gakugei.ac.jp/>

Title	LD児における漢字単語の読み困難とその支援に関する研究：通常学級児童の漢字単語読み困難との関連(論文要旨)
Author(s)	熊澤,綾
Citation	
Issue Date	2017-03-23
URL	http://hdl.handle.net/2309/147690
Publisher	
Rights	

氏 名 : 熊澤 綾
専攻分野の名称 : 博士 (教育学)
学位記番号 : 博甲第287号
学位授与年月日 : 平成29年3月23日
学位授与の要件 : 学位規則第4条第1項該当 課程博士
学位論文名 : LD児における漢字単語の読み困難とその支援に関する研究
—通常学級児童の漢字単語読み困難との関連—
論文審査委員 : (主査) 教授 小池 敏英
(副査) 教授 千田 洋幸 教授 伊藤 友彦
教授 澤 隆史 教授 山中 冴子

学位論文要旨

近年、医学的診断に基づくLD児の解明が進んでいる。このことから、通常学級に在籍する児童の低成績の実態とLD児との関連を検討することが必要であると指摘できる。

第1章においては、近年、アメリカにおいて注目されているRTIモデルと漢字単語の読みに影響していると考えられる単語属性について論じた。これらの2点を考慮することは、読み困難児に対する有効な支援の手がかりとなることが考えられる。そして、LD児における読み障害の背景要因とその支援、通常学級在籍児童における漢字読み困難の背景要因と早期予防的支援について論じ、LD児と通常学級在籍児童との関連を検討することを研究の目的とした。

第2章では、LD児32名を対象として漢字単語の読みの特徴を単語属性効果の視点から検討した。LD児では、ひらがな単語の読み困難のある特異的読字障害(以下、SRD児)とひらがな単語の読み困難のない非特異的読字障害(以下、NSRD児)が存在し、SRD児の読み困難が顕著であることが明らかとなった。また、単語属性効果を調べるために、各対象児に多重ロジスティック回帰分析を行った。その結果、心像性効果を指摘でき、高心像性単語より、低心像性単語の成績が低い児童が多く、特にSRD児に多く認められた。また、心像性効果が認められた事例はWISC-IIIの「注意記憶」が低く、聴覚記憶に困難をもつことを指摘できた。

LD児への指導として、単語の心像性を高める支援が有効であることが考えられたため、第3章では、LD児におけるイラストを用いた漢字の読み指導に関する研究を行った。LD児5名を対象にイラストあり条件とイラストなし条件で支援を行い、その成績の推移の違いについて検討した。漢字単語の読みに心像性の寄与があった3名、寄与がなかった1名はイラスト効果が認められ、特に、SRD児では、複数回指導することで定着がよいことが明らかとなった。一方、一貫性の寄与のあるNSRD児では、イラスト効果が認められなかった。このことから、LD児それぞれの読み困難の様相に合わせた支援が必要である。一貫性に寄与のある事例は1名のみであり、有効な支援の検討ができなかった。この点は今後の検討課題である。

第4章では、通常学級在籍児童1867名を対象として、漢字の読み書きの基礎スキルを反映する課題であり、読み書きの成績に影響されている単語連鎖課題、聴覚記憶課題の成績

との関連について検討した。発達の間与を調べるために、低学年、中学年、高学年について検討を行った。その結果、単語連鎖課題は、学年があがるにつれて検索できる単語の数が徐々に増えていくことを指摘できた。聴覚記憶課題では、中学年、高学年では、低成績者が一定数存在することを指摘できた。漢字の読み成績に関しては、成績が 2.5 パーセント以下のもは無回答が多いことが明らかになり、心内辞書の形成不全により、読み困難が生じていると考えられる。基礎スキルと漢字読みの成績の関連を検討した結果、低学年では単語連鎖課題が読み困難の背景要因となっており、高学年になるにつれて、聴覚記憶課題が読み困難の背景要因となっていることが明らかとなった。以上のことから、学年を考慮した支援が必要であることを指摘できた。

また、第5章では、通常学級在籍児童836名を対象として、漢字単語の読み困難の背景要因になると考えられる基礎スキルと単語属性の影響について検討した。2～4年生では、高心像性漢字の読字困難に関して、ひらがな単語連鎖課題が低成績の場合のオッズ比が有意に高かった。さらに、5・6年生では、低心像性漢字の読字困難に関して、順唱課題と逆唱課題が重複して低成績である場合のオッズ比が有意に高かった。これより、低学年では、流暢なひらがな単語の読みの低成績がリスク要因となり、高学年では、聴覚記憶の低成績がリスク要因となることを指摘できた。以上のことより、学年の上昇に伴い、リスク要因が変化していることを指摘できた。

以上の結果を踏まえ、第6章では、小学2年生611名を対象に基礎スキルの早期予防支援に関する研究を行った。プレテストとポストテストの間に、自作のワークブックを実施した。そしてプレテストとポストテストにおける順位変化について検討を行った。その結果、ワークブックを学校内でモジュールとして行った学校の児童の順位が最も上がり、実施しなかった学校の児童の順位が下がった。家庭学習としてワークブックを行った学校においても、順位が上がった児童が多かった。このことから、漢字書字の低成績の背景要因が漢字読字であることが明らかとなり、漢字読字に関する支援が必須であることを指摘できた。

通常学級在籍児童の漢字読字の背景要因は、LD児の漢字読字の背景要因と類似しており、早期予防的支援を行うことで、LD児の早期予防、早期発見につながるということが明らかとなった。これらの研究より、語彙ルートの機能不全は、漢字学習全般の低成績の生起に影響することを示唆するとともに、その発達的な遅れは、通常学級において広く起こりうることを指摘できた。